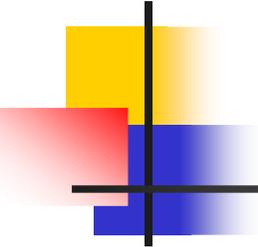


# 理論的課題

---

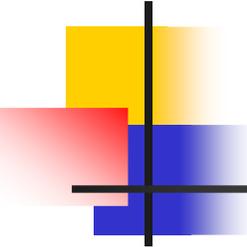
- (1) 類別詞は何に基づいて存在しているのか。
- (2) 類別詞を持つ言語と持たない言語はどこが違うのか。
- (3) 類別詞を持つ言語と数(単数・複数など)を持つ言語は相互排他的なのか。
- (4) 基本類別をたくさん持っている言語と少ない言語はどこが違うのか。
- (5) 日本語は類別詞の意味拡張が大幅に行われているという意味で特異であるが、それはなぜか。



# 「(1) 類別詞は何に基づいて存在しているのか？」に対する答え

---

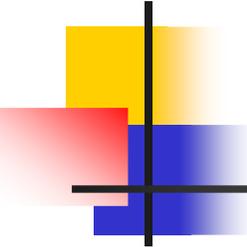
- Gelman and Gallistel (1978)の Partitioning
- まだ数えていないものとするでに数え終わったものとのを区別するためには数えていない山から数え終わった山へとものを移すことが必要になる。
- 物の形に応じてものをつかむ手の形が変わる。



# 数えることのプロトタイプ

---

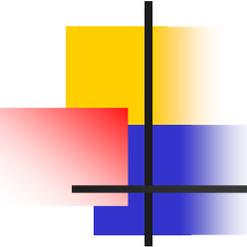
- 手で持ってpartitioningによって数える。→ 形が類別詞の使い方にかかわっている。
- 枚：平たいものの持ち方
- 本：棒状のものの持ち方
- 拡張によってこのプロトタイプから外れることもある。髪の毛、筆記用具、



# 把握動詞の区別

---

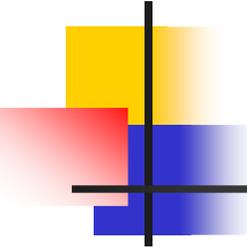
- 日本語:「持つ」「つかむ」「にぎる」
- 「持つ」は形状によって区別をしない。
- 鉛筆を持つ。
- 皿を持つ。
- りんごを持つ。



# 「つかむ」

---

- 森田(1998)『基礎日本語辞典』  
「相手や対象が動き逃れないように、または、自分側が不安定とならないように、それをしっかり持って安定状態を保つ行為で」ある。
- 鉛筆をつかむ。
- 皿をつかむ。
- りんごをつかむ。
- いずれも何とか押さえ込んでいるという意味。



# 「にぎる」

---

- 森田(1998) 「いったん自己の手に入れた事物は大事に自分のものとして継続して維持して放さない。」
- 「持つ」は無標の基本動詞であり、「つかむ」と「にぎる」は落とさないように力を入れて持つという意味が加わったもの。
- 把握動詞は持つものの形によって区別されていない。